

一 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

この文章は一人の少女の姿を描いた自伝的作品です。主人公のジーンはカナダ生まれですが、この時点では台湾で暮らしています。ジーンには軽度の視覚障がいがあります。

おばあちゃんは、ピアノのいすに腰をかけて、両手を上げたり下げたりしながら黒と白の長い鍵盤をたたいた。ヒューとわたしは立ったままで、さざ波のように鳴りひびく最高音から最低音までのくり返しにうつとりしていた。時折の不協和音など気にはしなかった。わたしたちは、おばあちゃんの激しい演奏が大好きだった。

おばあちゃんは、いくつかのミッシェンスクールでピアノを教え、合唱の指揮をしていたのだ。大人たちがうちへ集まるのは、子どもたちが寝たあとだったので、わたしはよく、暖かくて快い闇の中を流れてくる音楽を聴きながら眠りについた。

おばあちゃんは、ちゃんとした曲を弾くこともあったが、わたしはでたらめなアルペジオのほうが好きだった。おばあちゃんは、きつと子どもたちを楽しませようとしていたのだろう。

曲の終わりは、鳴りひびく和音に決まっていた。それから、わたしたちの賞賛を受けるために向き直るのだ。おばあちゃんは、それを楽しみにしていた。

わたしもピアノが好きだったが、だからためでなく、自分のために弾いた。長い鍵盤の前に立つて端から端まで動きまわる。わたしはピアノに語らせるのだ。

最初に低音で大男のしわがれ声を出してやる。「少女よ、おまえは何者だー」大男のうなり声をのばすには、片方のペダルがとても役にたつ。それから、右手をいっぱいにはし、高音部で少女のふるえ声を出すのだ。

「ああつ、大男がやってくるわー」少女がためらいがちに口ごもるのは、おそろしさからだ。大声を出す大男は、足音高く少女に近づく。「どしん！どしん！」右足でラウドペダルをしつかり踏めば、大男の足音がとどろきわたる。それから、急ぎ足で逃げる少女の足音……

全部をすばやく弾く理由は、ぐずぐずしているとだれかがきて、「鍵盤をガンガンやらないで、ジーン」と言うからだ。その時点で物語の筋が変わり、みんながぶつぶつ言っているような話になる。それでは、おもしろくもなんともない。

いつだったか、いつのまにかおばあちゃんが入ってきて、首をふつてみせてから言ったものだ。「すぐにレッスンを始めないかね。ピアノは音楽を作るもので、騒音を出すものじゃないんだから。」おばあちゃんが笑いかけてから、わたしは逃げだした。音楽ではなく、お話を作ってたことは言わなかった。

もつとも、今日のおばあちゃんは、ピアノを教えようとしていたのではなかった。指遊びを教えてくださいようとしたのだ。まず、おばあちゃんは、わたしたちにお手本を見せた。わたしはそばへ近寄った。おばあちゃんは両手を組み合わせ人差し指を立てた。何かを唱えながら手を組み変えた。わたしは、しつかりと見つめていた。

(注) 教会があつて。尖塔があつて。

とびらを開けると……
信者たちがいた。

おばあちゃんが手をほとんどたたくと、三歳のヒューが喜んで笑った。とつぜん、おばあちゃんの指が二列に並んだ信者たちになった。

「やらせてよ」と、ヒューが大きな声で言った。「やらせて。」

わたしはヒューに少しづつ詰め寄って、おばあちゃんのまねをする彼の手を見つめた。おばあちゃんがさっきの言葉を唱えた。そのたびにヒューの指が位置を変えて、おばあちゃんは喜んでうなずいた。わたしは弟に先をゆずったふりをした。

「ジーン、どうやるか、わかったの？」と、おばあちゃんが言った。

「わかったわ」と、わたしはつぶやいた。下くちびるをかねて両手を見つめながら、わたしは始めた。わたしは両手を組み合わせた。おばあちゃんが小さく舌打ちをし、ヒューが息をのんだ。直されないように、わたしは大急ぎでおしまいでやった。おや指を並べて教会のとびらをこしらえた。「とびらを開けると」と、わたしは歌うように言った。それから、組み合わせた指をひっくり返して、意気揚々と言った。「そして信者たちの列！」

ただ、信者たちはいなかった。わたしはがっかりして両方の手のひらを見つめた。信者たちは手のひらの裏側にいたのだ。わたしのやり方は失敗した。

「まらちがっていると買ったんだ」と、ヒューが勝ちほこったように言った。

「もう一度やってみるわね、ジーン」と、おばあちゃんが言った。「はじめは両手をこうするの。」わたしは（ ）。()。ヒューは自分が勝ったと思っただろう。今に見ているがいい。ゆっくりやれば、できるんだから。

「わかっているわよ。見ておいで。」わたしはヒューをどなりつけた。

わたしは始めた。わたしの指が教会の屋根を作ったとき、ヒューが大声で笑いだした。

「またまらちがえているよ、おばあちゃまー」と、ヒューがゴクリとのを鳴らした。

もし、おばあちゃんが右の手首をつかまれなかったら、ヒューをぴしゃりとやっただろう。弟のくせに、いつべんでやるんだから。「見ていらっしやい、ジーン。」おばあちゃんはヒューを無視して、わたしに言いわたした。おばあちゃんは指遊びをくり返した。どこでまらちがえたのか見つけようとしたが、わたしにはできなかつ

た。おばあちゃんの指は全部同じようなピンク色だった。涙があふれて目がかすんだ。

それを見たおばあちゃんは手をひざにおいた。しばらくのあいだ、どうすればいいのかわからないようだった。やがて、おばあちゃんはわたしの手をとった。両方の甲を合わせ、指の組み方を直した。自分のまらちがい気づいたとき、わたしはおばあちゃまから離れたが、かわいていた涙がまたにじんだ。

「教会があつて」と、おばあちゃんがわたしを元気づけた。

「自分で言うわ。」ヒューをちらりと見て、わたしは言った。ヒューはすぐさまできたかもしれないが、言葉はおばあちゃんに言ってもらったのだ。わたしは最後の一行まできたとき、指を動かして、信者たちをみんなきちんと二列になるようにした。

「二人ともよくやったわ」と、おばあちゃんが言った。「さあ、きれいな歌を教えてあげろわ。」

おばあちゃんは、いすを回してピアノに向かい、新しい曲を弾いてくれた。とてもいい曲だった。やがておばあちゃんは歌いだした。

「こっちへおいで」と、川が歌う

樹の上の木の葉に向かって

「連れていってあげよう

ひらけてゆく世界に」

おばあちゃんが歌いだしたときに、わたしは歌詞を覚えようとした。ヒューより先に覚えたかったのだ。身ぶりがつかなかったので助かったと思った。

「二番を通して歌いましょう」と、おばあちゃんが言った。

わたしはおばあちゃまと二人だけで歌った。けれども一番を歌い終えるまでに、覚えることの速さなど気にならなくなった。それよりも、高い枝から舞い落ちる木の葉のことを想像したのだ。木の葉が落ちるのを見たことはなかったが、遠い(故郷)のカナダの話は、大人たちから聞いていた。カナダ人は木の葉の(落ちる)季節を(秋)と呼ぶのだ。

カナダには四つの季節がある。わたしはその呼び方と風景を知っている。台湾には話題になる季節は雨期しかなく、何百万もの雨だれが(落ちる)だけだ。

わたしはカナダの秋の音が好きだ。

この歌は単に美しいだけではない。一つの物語がある。吹き飛ばされ、幅広く、かがやかしい川へ落ちる木の葉はどんなに興奮したことだろうか。

おばあちゃんが二番を歌いだした。

木の葉は静かに落ちる

樹の上から岸辺へ

川を下り

帰らぬ旅に出る

最後の二節はカナダへの楽しい夢に影を落とした。涙で目がひりひりした。

「いっしょに歌って」と、おばあちゃんが言った。ヒューは歌いでしたが、わたしはどがつまんで声が出なかった。

「ジーン、歌って。」おばあちゃんが声をかけた。

二番がくり返されてヒューも歌った。わたしはだまって立ったまま、みじめだった。おばあちゃんはピアノを弾くのをやめ、そばへ寄ってわたしをじっと見つめた。

「今度はどうしたの、ジーン？」と、おばあちゃんはいらいらした声を出した。

川が木の葉を流してやって、新しい世界を見せようとするが、二度と帰れないことは言わないでおくこと、どこがいけないと言えいいのか。木の葉は美しくかがやいて、水面を流れていくというのに。それも晴れた日に決まっている。けれども夜にはなるだろう。木の葉はひき返そうとするだろう。でも、川は木の葉をもとの木から離れた暗いところへ運ぶのだ。

ママに話したのなら、きつとわかってくれただろう。けれども、おばあちゃんはママではない。こわがるのはおかしいと思うだろう。お昼ごはんのときかなんかに、大人たちに話して笑いものにするにちがいない。今だって、わたしのことを笑っているのだから。

「きれいな歌よ」と、おばあちゃんは言った。「いったい何が気に入らないの？ 弟が歌うのを聴いてごらん。二歳も年下なのにもう覚えたのよ。」

わたしはまばたきをして涙をかくした。ヒューはほほえんでいた。わたしはしゃんとして、弟を冷たい目で見てから、一番と二番を歌い終えた。

これからもその日の悲しみは忘れないだろう。おばあちゃまにとっては、**A**にすぎなかった。わたしにとっては**B**だった。

⑦わたしはたったの五歳だった。力強い言葉が想像力を弱めるとは思わない。わたしは物語の中で生きることを知った。故郷にあこがれる木の葉の物語や、ピアノの音で生まれる人びとの中で。

(ジーン・リトル「天国のパパへのおくりもの」より)

【注】 不協和音⇨不安定な感じを与える和音

アルペジオ⇨和音を一音一音分けて演奏すること

ラウドペダル⇨音を大きくするペダル

尖塔⇨頂上がとがって高く突き出た塔

三 次の(1)～(5)の設問について、答えなさい。

(1) 次の①～④の文の——線部と同じ意味・用法のものをあとから選び、記号で答えなさい。

- ① 彼は文句を言うばかりで、動こうとしなかった。
 ア 私がかわったばかりにかえって君を困らせた。 イ たった今旅行から帰ってきたばかりだ。
 ウ 状況はどんどん悪化するばかりだ。 エ バスの到着が遅れ、一時間ばかり待った。
- ② クリスマスの日のことは思い出すのさえないやだ。
 ア 多くの家が崩れた上、火事さえ起こった。 イ 子どもでさえこんな問題は解ける。
 ウ 彼女はこちらを見ようとさえしない。 エ 子どもだけでなく大人さえ夢中になる。
- ③ 食堂で担任の先生らしい人を見かけた。
 ア 一人で留守番する娘がいじらしい。 イ 学生らしい服装で登校しなさい。
 ウ 女性らしい細やかな心遣いをみせる。 エ やっぱりあの事故が原因らしい。
- ④ オートバイは爆音をひびかせながら、走り去った。
 ア 自宅にいながらでも、充分仕事ができる。 イ 陰ながらその事業には協力したいと思う。
 ウ いつもながら彼の行動力には感心する。 エ 娘は貧しいながらも幸せに暮らした。

(2) 次の①～⑥の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① A ツトめて早起きをする。 B 児童会長のツトめを果たす。
 ② A 負けられない勝負にヤブれる。 B 平和な状態がヤブれる。
 ③ A 人は法のモトに平等である。 B モト住んでいた家を見に行く。
 ④ A 戦国時代に勢力をノばした武士。 B 日本の平均寿命がノびる。
 ⑤ A 今週末の会議で決を下る。 B 一大決心をして資格を下る。
 ⑥ A 消費者の便宜をハカル。 B 頃合いをハカってボタンを押す。

(3) 次の①～④の四つの熟語が完成するように、○に共通の漢字一字を入れなさい。

- ① 好○ ・ 強○ ・ ○和 ・ ○度
 ② 式○ ・ 固○ ・ ○職 ・ ○書
 ③ 実○ ・ 安○ ・ ○筆 ・ ○立
 ④ 気○ ・ 断○ ・ ○食 ・ ○望

(4) 次の①～④の慣用句を、下の意味にしたがって完成させなさい。ただし——線部の○にはひらがな一字が入ります。

- ① ○○○を削る 〓 激しく戦うこと
 ② 枚挙に○○○がない 〓 たくさんあり過ぎて数えきれないこと
 ③ ○○○の涙 〓 ほんのわずか
 ④ ○○○をくくる 〓 たいしたことないと軽く考える。

(5) 次の①～⑤の俳句について、《 》の解説文を参考にして、それぞれの季節を詠んだものか、春夏秋冬のいずれかで答えなさい。

- ① 万緑の中や吾子の歯生え初むる (中村草田男) 《緑の木々の充実した生命力に呼応するかのように、我が子にも白い歯が生え始めた。》
 ② 流水や宗谷の門波荒れやまず (山口誓子) 《季節風にぶつかり合う宗谷海峡の流水。荒波はいつまでも治まりそうにない。》
 ③ 星空へ店より林檎あふれをり (橋本多佳子) 《満天の星空のもと、果物屋の店先には林檎があふれんばかりに積まれている。》
 ④ 小春日や石を噛み居る赤蜻蛉 (村上鬼城) 《日に温められた石の上に赤蜻蛉はじつとどまっている。》
 ⑤ 雪残る頂一つ国境 (正岡子規) 《国境の高い山の頂には雪が残っているのが見える。》

受験番号

一

問一 こと

問二

問三

〈おぼあちやま〉

気持ち

〈ヒュー〉

気持ち

問四

問五

④

⑤

から

問六

から

問七

A
B

問八

少女

二

問一

A
B
C

問二

問三

問四

状態

問五

問六

三

問一

①
②
③
④

問二

① A
② B
③ A
④ B
⑤ A
⑥ A
⑦ B

① A
② B
③ A
④ B
⑤ A
⑥ A
⑦ B

問三

①
②
③
④

問四

①
②
③
④

問五

①
②
③
④
⑤